

## 対話が生まれる美術館

～飛騨市美術館のもう一つのリニューアル～

飛騨市美術館は、令和5年4月にリニューアルオープンしました。これまでの関係者のご努力が実り、懸案だった空調設備や照明、ピクチャーレール等が整備され、作品をいつそう大切にできる展示環境へと変わりました。

ここでは、リニューアルのもう一つの側面である飛騨市美術館の理念、「対話が生まれる美術館」について記してみます。

### ◇対話型鑑賞が生み出すもの

1990年代、MoMAのアメリカ・アレナスが提唱した「対話型鑑賞法」は、今では国内の多くの美術館が取り入れる鑑賞の一つの潮流となっています。この鑑賞法の肝は、A→Bへと、一方通行のかたちで作品の見方・感じ方を強くないということです。そうではなく、AがB,C,D,E…にそれぞれ様々な見方・感じ方ができるように働きかけるということ、さらに、A⇔B,C,D,E…の双方向の流れの過程で、鑑賞者が自分の見方を深め、新たな感じ方ができるよう、Aが「対話」を促すというものです。

飛騨市美術館は、来館者がこの「対話」による鑑賞の楽しさを味わい、今までにはない感じ方をする自分に出会う(気づく)ことを運営の一つの柱としています。すなわち「対話が生まれる美術館」です。



この写真は、「令和」の書家、「茂住菁邨展」の際に筆者が行った鑑賞風景です。地域の子どもたちは、中国の「四神」の書の中に、びつ

りするような発見をし、他者の感じ方を知り、新たな自分に気づいていきます。ここには「対話」による鑑賞のダイナミズムがあります。

### ◇問いかけるキュレーション (1)

「対話が生まれる美術館」に向けて、もう一つ飛騨市美術館が心がけていることは、来館者に問いかける(感じ方を深めさせる)展示の工夫、パネル

(資料)の作成ということです。作品を丁寧に説明することも大切ですが、「対話」を生み出すために、時には来館者にポンと投げかけ、余白を残したまま消えていくような展示、資料の提示ということも大切だと考えます。



左の写真は令和5年度開催の「船坂芳助版画展」の展示準備の様子です。

この展示では、95点のマット装の船坂作品を、21メートルのロングな壁面に2段の直線を基調にしながら、所々、並びの凹凸や色のアク

セントを加えて展示しています。

展示室に入ってこれらの壁面の作品群に出会い、来館者は戸惑うかもしれません。通常の展示のスタイルとは異なるからです。ただ、作品に加え、「展示」についても問いかけられ、自分なりの解答を出すこと、そこには美術館と来館者の「対話」が生まれます。

### ◇問いかけるキュレーション (2)

4月のリニューアル記念展は、戦前・戦後の飛騨の画家の足跡をたどる展覧会でした。昭和11年、東京美術学校を卒業後、満州国へ出征した上原誠の満州の絵の連作の近くには、上原誠の言葉を添えました。「…僕の青春は七年間の兵隊生活 戦争の故に弟は亡くなり 絵のわかる大切な友人は死んで行った…」上原誠が残した言葉とともに、彼の絵と「対話」してほしいと願い、添えたものです。

飛騨市美術館は、来館者が作品と出会い、その表現や人、展示…と「対話」することで、新しい見方ができる自分に気づくことを願っています。「私って、こんな風に感じることもできるんだ！」という思いが、新しい一歩を踏み出す力になります。

(飛騨市美術館 上屋美千弘)

## 飛騨ブロック部会 「小規模ミュージアムネットワーク 全国サミット in 飛騨」 の開催報告

期 日：令和5年9月3日(日)・4日(月)  
場 所：飛騨みやがわ考古民俗館他  
参加者：のべ62名+オンライン66名

小規模ミュージアムネットワークとは、職員数名の小規模博物館からなる館種をこえた全国ネットワークで、現在400名あまりが参加しているコミュニティです。

全国サミットは、コロナ禍で対面では4年ぶりです。今回は、山形県から鹿児島県まで2日のべ62名の学芸員らが参加し、「地域を語る～コレクションの意味と魅力」をテーマに、博物館の発展と地域貢献などについて話し合いました。

初日は飛騨みやがわ考古民俗館で収蔵資料の価値と活用方法を考えるワークショップを開催し、2日目は発表とシンポジウムでした。

多くの小規模ミュージアムが抱える課題としては、展示ケースなど備品の貸し借りなど地域をまたいだ連携の必要性や、将来は人材の共有もありうるのではないかといった専門職員不足のこと、散逸している地域資料の把握といった問題点が認識されました。

一方、魅力づくりでは、朝日町まいぶん KANで縄文時代の種子を調べる土器の圧痕調査や下張り文書調べなどを、市民参加で実施して理解者やファンを増やしていることなどが紹介されました。



シンポジウムの様子

その様子はオンライン配信でも66名の参加があり、各地の博物館の事例の共有を通じて、地域と博物館のつながりを考えるサミットになりました。

(飛騨みやがわ考古民俗館 三好清超)

## 令和5年度 中濃ブロック部会 会員研修会 「第17回博学連携フォーラム 『作る・感じる・伝える』 ことから子どもたちが学ぶもの」

日 時：令和5年10月20日(金)  
9:15～16:45

場 所：美濃加茂市民ミュージアム

参加者：約40名

講 師：愛媛県美術館 学芸員 鈴木有紀氏

美濃加茂市民ミュージアムでは、2004年から博学連携フォーラムと題して博物館を活用した学校の学習活動を考える会を開催してきました。新型コロナウイルス感染症の流行を考慮し3年間休止しましたが、今年、中濃ブロック部会と共催で4年ぶりの開催でした。

本年度は午前中に市立小学校4年生の社会科の授業公開でした。古文書や民具資料、立体地図などを活用し、先人による溜池造成の意味や苦勞、協力を学ぶ単元です。資料を目の前に、「どこからそう思う？」の問いかけをしながら、これまで以上に、「対話的な活動」を意識した授業展開となりました。

後半は、対話型鑑賞の活動を広く行われている愛媛県美術館の鈴木有紀氏をお招きし、「対話型鑑賞プログラムの楽しみ方(活用の仕方)をナビゲート！～どこからそう思う？からはじめよう～」をテーマにお話をいただきました。冒頭では、スクリーンに映し出された写真をじっくり観た後、参加者の方とともに「何だと思うか」「どこからそう思うか」のやり取りをしながら、対話的鑑賞をどのように行い、参加者の発言から気づきをうながし広めていくのかを実際に体験しました。また、美術作品を鑑賞する際の鑑賞者の認知の仕方のパターンや思考の流れ、認知の段階的な発達の仕方など、ハウゼンの美的発達段階を例に挙げながら、鑑賞の際の声掛けの仕方やタイミングなどについても話をしてくれました。

「どこからそう思う？」は、目の前にある資料のどの部分から、「そのように感じたのか、考えたのか」を問うもの。来館者一人ひとりの体験や予備的な知識がなくても、目の前のものを手掛かりに気づくことができる、他者の気づきから知ることのできる、そんな問いかけの言葉でした。

(美濃加茂市民ミュージアム 西尾円)

岐阜県博物館学芸講座・  
第174回岐阜県博物館協会中濃ブロック公開講座  
「『緩やかな保存』の提案  
地域民具資料のこれからを考える」

期 日：令和5年7月17日(月・祝)  
場 所：岐阜県博物館 けんぱくホール  
講 師：国立歴史民俗博物館 研究部 特任助教  
川邊咲子氏  
参加者：53名



企画の発端は、資料除籍・廃棄のための鳥取県北栄町「お別れ展示会」を取り上げた東京大学文化資源学フォーラム(1)と、日本民俗学会第74回年会プレシンポジウム(2)でした。本巣市の民具整理の事例(3)にも触発され、新進気鋭の民俗学者が提唱する「緩やかな保存」をご紹介いただく機会を設けました。

奥能登国際芸術祭のアート作品に活用された能登半島の民具コレクションの危機的状況や民具の収集と調査、台帳整備等、地道な活動について、利活用しながらの「緩やかな保存」概念を解説くださいました。改変を許さない厳格な保存以外にもさまざまな方法があることを知り、視野が広がりました。

明るい見通しをもって終了した講演でしたが、調査地は令和6年能登半島地震のため、対象の民具資料も被災しました。講師によると、6年2月現在、未だ現状把握の段階とのことですが、関心を持ち続け、文化財レスキューと「緩やかな保存」の今後についても注視していきたいと思えます。

- 注(1) 第18回「コレクションを手放す 譲渡・売却・廃棄」(2019/2/17)  
(2) 「半島のアート、民俗の果て」(2022/10/1)  
(3) 岐阜県博物館協会第2回もの部会・研究部会「本巣市所蔵 移転民俗資料現地調査会」  
(岐阜の博物館 No.192、2023/3/31)  
(岐阜県博物館 南本有紀)

令和5年度 中濃ブロック  
「岐阜現代美術館移設展示  
篠田桃紅アトリエ見学会」

日 時：令和5年12月21日(木)  
13:30~15:30  
場 所：岐阜現代美術館(桃紅館)  
参加者：12名  
共 催：日本展示学会中部地区

現在、岐阜現代美術館の向かい側に建設中の「桃紅館」の見学会が開催されました。建物は1階に173.48㎡の企画展示室を備え、2階の、回廊を含む99.80㎡のスペースには、移設された桃紅のアトリエが精巧に再現されています。今年3月末の開館に向けた「アトリエ移設・再現プロジェクト」として、全過程を担当した宮崎香里学芸員から解説を伺いました。

プロジェクトは、没後に貴重な資料の散逸を防ぐため2021年秋頃からスタート。東京南青山の住居兼アトリエから、画材をはじめ移設可能な建材に至る全データを、様々な媒体を用いて詳細な記録に残すことから始まりました。実際の移設・再現に向けたクリーニングや燻蒸くんじょうなどの保存処理を行い、新たに設置する資材には、経年の変化や痕跡の忠実なトレーシングが施されていました。「桃紅館」の2階で「アパートメントの古いドア」を開けると、そこには作品制作の情景を容易に想起させる場と、作家の思想や嗜好に満たされた空間が広がり、豊かな時間の移ろいを体感することができました。



桃紅の仕事を包括的にアーカイブすることになる場の再構築は、作品と作品以外の資料の活用の仕方や保存の在り方を問うプロジェクトとしても、今後の展開が期待されます。

(各務原市歴史民俗資料館 廣江貴子)



## 東濃ブロック部会 会員研修会 「博物館と特別支援学校との 連携を考える」

日 時：令和5年11月28日(火)  
13:30～16:00

場 所：多治見市美濃焼ミュージアム

参加者：14名

講 師：長谷川善弘氏

東濃ブロック部会では、特別支援学校と博物館との連携をすすめるため、岐阜県立東濃特別支援学校教頭の長谷川善弘氏を講師にお迎えし、研修会を行いました。

年々、地域の学校と博物館との連携が盛んになっていることはうかがえますが、まだまだ特別支援学校や障がい者利用は進んでいないように感じます。そこで、今回の研修会では、博物館側が支援学校のことを知る、そして、学校側にも博物館の利用について知ってもらう、相互に知ることから始めていきたいと考え、企画しました。

東濃特別支援学校は土岐市に所在し、小学部から高等部まで児童・生徒数約200名の学校です。当日は、教頭の長谷川氏から学校の様子、児童生徒の学習や活動の状況、校外学習の現状などについてお話いただきました。その後、サイエンスワールドと多治見市美濃焼ミュージアムの実践例が各担当者より紹介された後、長谷川氏を囲んで座談会を行いました。

特別支援学校として、スクールバスを活用して校外学習を実施し、子どもたちが多様な体験をする機会を設けたいと考えていること、「共生」を目指して地域の子もたちとの交流の場を増やしたいこと、美術教育による自由な表現の場を学校の授業で設ける機会が減っていることなどの課題をあげられ、博物館への期待を述べられました。

また、東濃地方ならではの学校の特色としては、教育に陶芸を取り入れてきたことがあり、以前は野焼きなど様々な陶芸体験を行ってきたものが、近年は教員が指導できなくなっているという課題もあげられ、会員からは博物館が地元の陶芸家とつなげて活動が行えるかもしれないという意見が出されました。

これからも特別支援学校との交流の機会を設け、博物館利用が盛んになっていくとよいと思います。

(土岐市美濃陶磁歴史館 春日美海)

## 岐阜県博物館協会もの部会・ デジタルアーカイブ研修 「図書館に学ぶ資料のデジタル化 とデジタルアーカイブ」

期 日：令和6年1月17日(水)

場 所：岐阜県博物館 けんぱくホール

講 師：国立国会図書館関西館 電子図書館課 岡本常将氏

岐阜県図書館サービス課 総井純子氏

美濃加茂市民ミュージアム 藤村 俊氏

羽島市不二竹鼻町屋ギャラリー 土居万莉奈氏

参加者：56名(うちオンライン32名)

改正博物館法で博物館の事業として法的に位置づけられたデジタルアーカイブについて、博物館に先行して整備公開を進めてきた図書館から事例と実務を学ぶ研修を実施し、図書館関係者をはじめ、オンライン配信との併催により県外からも多くの参加者を得ました。

最初に、事務局から開催の企図と博物館・図書館のデジタルアーカイブを比較して示し、講師からは、国会図書館から同館をはじめ全国の事例と公開方式等の手法を多数紹介・整理いただきました。続いて、県図書館の事例報告と、研修に先駆けて実施された県博協もの部会アンケート調査の概略報告があり、最後に、情報交換会を行いました。

図書館側からは、図書館のデジタルアーカイブは法的に位置づけられていないこと、既にノウハウ蓄積があり目的、スタートとゴールが明確であること、博物館側からは、機関や立場によって目指すデジタルアーカイブ像が異なること等の意見が挙げられました。今後もMLA連携について情報収集していきたいと思えます。

(岐阜県博物館 南本有紀)



## 令和5年度 岐阜県博物館協会 「県民文化講演会」 「岐阜の山城－その魅力を探る－」

日 時：令和6年1月27日(土)  
14:00～15:30

場 所：岐阜県博物館けんぱくホール

参加者：100名

講 師：中井 均氏（滋賀県立大学名誉教授）

今年度は講師に滋賀県立大学名誉教授である中井均氏をお招きし、岐阜県内の城館跡の調査から読み解く戦国史について講演いただきました。



冒頭は「城」と「砦」の違いの話で、「城」は領主として民に認められるための権威の象徴、一方、「砦」は戦に伴う緊急に立てた小規模な建物であり、美濃守護土岐氏の大桑城を例に城の構造の解説でした。大桑は高い山を見渡せる場所に位置しており、山頂部は小規模な曲輪を配置するのみで、西側谷筋に階段状に構えられた曲輪群を守るような構造になっていたことや、山頂部付近の「伝台所」から検出された石垣と庭園から、大桑の山城に会所的空間が存在していたことを読み解きました。

次は織田信長の居城についてです。織田信長の居城である小牧城、岐阜城、安土城はすべて山城である。居城を石垣によって築くことから、権威を示すものであること、また、庭園を伴って居館構造だったことから、信長の居城は公的な場と私的な場の二元的構造になっていたと読み解きました。

今回の講演会を聞き、特に印象に残った話は「城跡は何も残っていない」ではなく「城跡は戦国時代の遺構が残っている」というとらえです。今も山中には本物の土塁、堀切が残っており、山城を歩くことで戦国大名の生き方を感じることができるということです。協会加盟館には地域特有の資料が展示、保存されており、それらの資料が今も残されているととらえ、詳しく読み解くことで、その時代を生きた人々の思いや願いをより強く理解できると感じました。

(岐阜県博物館 則竹裕嗣)

## 令和5年度 会員研修会 「刀剣類の取り扱いを学ぶ」

日 時：令和6年2月8日(木) 10:30～15:00

場 所：岐阜県現代陶芸美術館

講 師：柴田明芳氏・水野竜夫氏ほか

参加者：32名(午前15名・午後17名)

東濃ブロック部会で開催している「博物館資料の取り扱い」4回目の研修で、今回はひと部会との共催により、午前の部・午後の部の二部構成で開催しました。

午前の部では、岐阜県古式銃砲刀剣類審査員である柴田・水野氏を講師にお招きし、まずは自宅等で刀剣類を発見した際は所管の警察署に届出を行い、その後は県庁等で登録を行う必要があること。寄附の申し出があった際には登録証の有無を確認し、登録された都道府県の担当部局で所有者変更の手続きを行う必要があること等、古式銃刀法登録制度の概要を学習しました。

続いて、日常管理の方法では、鞘・柄・目釘・刀身の抜き方や納め方、油取り・打粉打ち・油塗りの方法を、講師が所有する実物の刀剣を用いて、各参加者が実技を学びました。



午前の部(日常管理の方法)の様子

午後の部では、日博協の美術品梱包輸送技能取得士1級資格保持者である山田晃彰氏を講師にお招きし、展示・梱包の手法を学びました。

展示では、刀掛けの底部にシリコンシートを敷くことで安定性が増すこと、木製の刀掛の窪み部分には鉛の板を設置しておくことで錆防止になること等を示していただきました。また、参加者からは「博物館によっては、白布に正絹を用いることが借用の条件になる場合がある」等の有益な情報提供がありました。

梱包では、白鞘、拵という二通りで手法を示していただいたほか、梱包容器等を準備するためには、登録証に記載のある長さや反り等の情報が必要であることをご教示いただきました。

(瑞浪市陶磁資料館 砂田晋司)



## 「第47回東海三県博物館協会 研究交流会」

日 時：令和5年11月14日(火)  
13:00～15:50  
場 所：鳥羽水族館 4階レクチャールーム

東海三県の博物館職員が参加

以下の3つのトークテーマについて、グループに分かれてグループトークセッションをし、グループごとにトーク内容について発表を行いました。

「財源の確保」

・これからの博物館 どう稼ぐか

「人と博物館の未来」

・学芸員や飼育員等の知識の継承  
・博物館の人的ネットワークの構築

「これまでとこれからの資料収集」

・収蔵庫問題と増える収蔵資料への対策  
・収蔵資料のデジタル化をどう活かすか



トーク内容の発表の様子

財源確保についてはクラウドファンディングの有用性と問題点やオリジナルグッズの開発、人と博物館の未来では、博物館実習や職員の研修、他館との協力体制、資料収集については収蔵スペースの確保と資料整理の困難さなどがそれぞれ話し合われました。

各館が持つ課題を出し合い共有するとともに、その解決策や他館の持つノウハウなどの情報を交換することで、より良い博物館運営につなげることができる内容であったと感じました。

(岐阜関ヶ原古戦場記念館 鶴飼裕紀)

## 第71回 全国博物館大会に参加して

期 日：令和5年11月15日(水)～17日(金)  
場 所：千葉市文化センター

令和5年11月15日(水)から千葉県で開催された第71回全国博物館大会に参加しましたので概要をご報告します。この大会は、「博物館法改正元年 - つながり、交差する -」をメインテーマに、「過去から未来へ資料やその価値を紡ぐ博物館の役割」をタテの時間軸、「地域社会での教育や文化観光などにおける資料の活用」をヨコの空間軸とし、これからの博物館を考えていく場となるようプログラムが構成されました。

具体的な内容としては、初日は「つながりをつくる博物館 - 多世代共創とウェルビーイング」のテーマで、国立アトリサーチセンターの稲庭彩和子ラーニンググループ副グループリーダーによる基調講演が行われ、上野公園周辺の9施設による「あいうえの」などの事例や、文化財を通して人々の間につながりをつくることなどが説明されました。

この後、全国博物館フォーラム「改正博物館法を現場の運営に活かす」が開催され、文化庁からの行政報告や、博物館の基本的運営方針・ミッション、収蔵品のデジタルアーカイブ化、他施設との連携などに関してパネルディスカッションが行われました。

2日目には、「デジタルアーカイブと博物館DX」、「博物館と多様な主体」、「地域の特性と博物館」の3テーマで分科会が行われた後、シンポジウム「博物館法改正元年 - つながり、交差する -」で各分科会の報告が行われたほか、最近話題となった国立科学博物館のクラウドファンディングの紹介もありました。

最終日は、千葉県内の博物館等へのエクスカーション(3コース)がありました

今回の大会への参加を通して、法改正を機に、博物館においては、それぞれの基本的運営方針やミッションをしっかりと作り来館者や地域住民・地域社会のニーズに応えていくことが一層重要になっており、そのことが館運営の基盤となる財源や人材確保にもつながることを再認識したところです。第72回は長野県松本市で開催予定です。

(岐阜県博物館 河田哲也)

# 能登半島地震による 飛騨みやがわ考古民俗館の 被害について

飛騨みやがわ考古民俗館

2024年1月1日に発生した能登半島地震は、石川県を中心に博物館施設等に甚大な被害をもたらした。飛騨市においては震度5弱を記録し、飛騨みやがわ考古民俗館においても展示資料が被災した。本稿では、経緯と状況を報告し、今後の展望を述べたい。

## 1. 経緯

1月1日：地震発生後、無人開館システムの遠隔地カメラにて、資料の転倒等を確認した。なお、飛騨市では災害対策本部、避難所を開設した。22時までには、人命に関わる被災等はなく避難所利用がないことから災害対策本部・避難所を閉じた。

1月2日：職員が飛騨みやがわ考古民俗館の現地確認を実施した。展示室の縄文土器と民具が転倒し、破損している状況を確認した。一方、収蔵庫及び館内の茅葺民家「旧中村家」では、被害がなかったことを確認した。

1月4日：職員2人が被災資料の片づけを実施した。被災資料は縄文土器10点・民具3点であった。縄文土器のうち8点は岐阜県重要文化財(考古資料)「堂ノ前遺跡出土品」として指定されていたため、同日付けで毀損届を県庁に提出した。

2月20日：飛騨市教育委員会からの派遣依頼に応じ、今後の修復作業等に県博物館協会が協力するか検討するため、可児光生氏が被災状況の把握のために来館された。



震災直後の展示ケースの状況(1月4日撮影)

## 2. 被災の内容

展示面がガラス製の壁面展示ケースに展示している縄文土器が、悉く移動し、そのうちの幾つかが転倒していた(左下写真)。転倒資料のうち13点は、上半部が破損していた。このため、転倒した際に上半部が床面に打ち付けられ、破損したものと想定された(右下写真)。民具は展示ケース内の土雛が全て転倒し、うち2点が破損した。また、オルガンの木製蓋が接合部分で剥離していた。



被災した土器(2月20日撮影)

今後は被災資料の修復対応が必須である。館は4月後半まで冬季閉館のため、次の開館までに展示ケース内の資料を修復させたい。また、全体的な防災対策を見直す必要があり、他館の取り組みなどに学びながら、少しずつ対応していきたい。

(飛騨みやがわ考古民俗館 三好清超)

### —岐阜県博物館協会の対応—

岐阜県博物館協会(もの部会)としては、状況の把握後、飛騨市と連絡を取り合い、まず1月16日に当面の作業に役立てていただけるようレスキュー支援キットを送付した。飛騨市からの協力要請を受けて、また2月20日の現地調査を踏まえて今後の具体的な活動を協議しているところであるが、4月以降に、破損した土器の修復において活動を行う予定である。

(岐阜県博物館協会企画委員長 可児光生)



# 博物館協会インフォメーション

## 図書紹介

『ふるさと北方に生まれ輝いた人

ー日本の博物館の育ての親ー 棚橋源太郎』  
棚橋源太郎顕彰委員会 著・発行  
2023年8月

「岐阜の博物館」192号で少し紹介をました棚橋源太郎顕彰委員会による伝記が刊行されました。理科教育や博物館活動、博物館法の制定や学芸員の養成にも尽力した棚橋源太郎は(たなはしげんたろう 1869-1961)は、本巣郡北方町の出身。その理論と実践の両方から迫った源太郎は、「博物館学の父」(中川1979年)や「博物館育ての親」(伊藤1983年)とも称されました。

北方町では令和5年度に小中一貫の義務教育学校が開校。この学校では地域を学ぶ「北方科」という新しい教科が設けられ、地域の歴史や文化について知る、発信する、未来を考えるなど教科横断的に学ぶ課程があります。もちろん源太郎も登場します。本書は地域の先輩である源太郎を深く学ぶ子どもたちの助けになると考えます。

本書は冒頭に源太郎の孫にあたる棚橋泰氏による寄稿文「明治の人(祖父を思う)」、続いて源太郎の著書やゆかりの資料などを写真で紹介する口絵が続きます。そして源太郎の伝記は①学園1年生から4年生向け、②学園5年生から9年生向け、③一般向け、という3部構成になっています。本文は単に漢字にふりがなをふるだけでなく、子どもたちの発達段階に寄り添うやさしい言葉づかいを用いるなどの配慮がなされています。随所に描かれた手書きのイラストも委員の一人がこのために描き下ろしたもので、子どもたちの理解を深めることに役立つことでしょう。また生涯の年表や参考文献、転用したホームページなども丁寧に拾い上げ、学習の後に深く、広く知るための手がかりもあります。

源太郎の伝記は、宮崎惇『棚橋源太郎 博物

館にかけた生涯』(岐阜県博物館友の会 1992年)があります。本書はそれを大切に執筆されましたが、顕彰委員会の皆さんが力を合わせまとめられたものです。言葉や表現に迷う時や顔を突き合わせての打合せのできない時期など容易くないご苦労があったことと推察します。しかし手に取る子どもたちを思い、作成過程を顕彰委員会の皆さんが楽しみ、精力的に活動されたことも感じられる内容です。今後の顕彰委員会の引き続きの活発な活動に期待したいと思います。  
(美濃加茂市民ミュージアム 西尾円)

## 編集後記

協会ホームページが更新されて2年になります。みなさん、日ごろから閲覧いただけていますでしょうか。各部会、地域ブロック部会より研修会等の案内がこまめに更新されておりますので、この機会にご確認ください。また、ホームページだけでなくSNSとしてXを更新しております。今後、活動の様子を掲載することで協会との距離を縮めていければと思っております。それぞれの部会の活動をXで更新する際は事務局を通してこと部会までご連絡ください。ホームページ、SNSを通して、加盟館園のつながりが深まっていければと思っております。今後ともよろしく願いいたします。



### 岐阜の博物館 News Letter No.194

編集：岐阜県博物館協会「こと部会」

発行：岐阜県博物館協会

事務局：〒501-3941 関市小屋名1989(岐阜県博物館内)  
(電話)0575-28-3111 (FAX)0575-28-3110  
(URL)https://www.gifu-museum.jp/